① KENTWOOD,KENTLAKE 高校滞在記（生徒編）
I'll be back...

3年1組　K.M.

このプログラムに参加できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。正直、出発前の１週間ほどは、英語が聞き取れないのではないか、伝わらないのではないかという不安こそなかったものの、本当に自分が行ってもいいのだろうかと考えては、憂鬱になりました。というのは、みんなと一緒に２週間の間、はしゃぎ続けられる自信がなかったからです。でも、そんな心配は無用でした！異国の地で日本にいるときとは違う自分になる。ホストをはじめたくさんの人に刺激をもらう中で、意外にも簡単にできることでした。窮屈なフライトから８時間ののちに解放された私を空港で迎えてくれたのは、１週目のホスト、Bonnie でした。過去の報告集に書かれているような「人見知り」といった印象はなく（私が彼女以上の人見知りを起こしていたのでしょうか)、多方面と携帯電話で連絡を取り合う姿はしっかり者のお姉さんという印象でした。到着した日はシアトル観光として、Space　Needle（シアトルの街のシンボルとも言える展望タワーです）や、Pike Place Market(スターバックス１号店がある市場ですが、予定の把握ミスでスタバには誰一人として私たちは行けませんでしたが)に連れて行ってもらいました。次の日から Kentwood 高校に通いました。北野と勝負できるくらい校舎の作りが複雑で、最後まで移動経路を覚えることはできませんでした。生徒は、自分の興味のある分野の授業をとっているので、それだけ授業に対する意識が高く、活気のある授業ばかりでした。中には、大学レベルの内容を扱うため日本と同じような講義形式の授業もありましたが、そのような授業でも先生が質問を投げかけると積極的に答えていたし、なによりプレゼンや話し合いの形式が多いことが新鮮でした。日本語のクラスでは毎時間パーティーをしてくれて、食べたり飲んだりしながらのおしゃべりをしてばかりで、授業らしい授業には出会えませんでした(笑)。この１週間の放課後は、レーザータッグ（レーザーを使ったシューティングゲームで、ボーリングと同じ感覚の娯楽のようです）やショッピングに行き、コビントン市長訪問や CBF(Cherry Blossom Festival)もありました。高島さんの誕生日パーティーでは、ちょっと子供向けだけど、と言いながらイースターのエッグハントを教えてもらいました。ホスト同士の仲が大変良いこともあり、常に一緒に行動していました。ホストチェンジのときには、別れるのがつらくて、１週間で交代という制度

を恨めしく思いました。

２週目のホスト、Kentlake の Tia は写真とテニスが大好きなとても可愛い女の子でした。Tia の家は豪邸で、マッサージチェアが５台あるシアターの部屋があり、別館?の１階にはトレーニングジム、２階にはゲームセンターのような空間が広がっていました。１週目と異なりこちらは、これぞアメリカン！と感じることばかりでした。みんなすごく energetic で、１週目に固執し気味だった私は圧倒されてしまい、気づくと英語の聞き取りの能力が落ちていました。新しい環境に慣れるにつれ回復はしたのですが、可能性を開かせるのも潰すのも自分の心持ちであると改めて思いました。Kentlake の日本語の授業は、先生が日本人だということもあってか、日本の授業に似ていました。今年から始まった日本の文化を英語で紹介しよう！という趣旨のプレゼンを毎時間行ったのですが、みんなたどたどしい Japanese English を真剣に聞いてくれて、質問もしてくれて、私のプレゼン嫌いさえ治ったように思います。この週もいろんなところに連れて行ってもらうと同時に、若者の文化をたくさん教えてもらいました。こればかりは現地に行かないと知る機会はないでしょう。

この２週間、ことばに関して困ったことは少なかったように思います。伝えたい！という気持ちがあれば、少々めちゃくちゃでもわかってくれます。電子辞書は携帯していましたが、ホストとは意味を調べるのに使い、他の人とは会話の出発点になりました。また、想像していたよりもはるかに私は日本人であったことに気づかされました。

帰国して、いわゆる逆ホームシックというのにはなっていません。実際パスポート紛失しよ～、帰りたくないよ～と言っていたくらいなので、アメリカが嫌だったというのでは決してなく、私は Bonnie や Tia 達にすぐに会えることを確信しているからです。それに、そんな受身の希望だけでなく、もっと英語を話せるようになって、必ず Kent をもう一度訪れようと心に決めたからです。

「夢にまで見たホームステイ」

３年１組　T.M.

私は高校に入学したとき、北野がケントの高校と国際交流していることを知り、そのときからずっとアメリカでホームステイをしたいと思っていました。幸運にもケントへの派遣

が決まり、それからは英会話の勉強や準備に追われる日々でした。

1 週目のホストの Danya（ダンニャ）とは出発前からメールのやり取りをしていました。そのときに Danya の家族みんなが私のことを歓迎してくれていることがわかり、私も安心し出発が待ち遠しくなりました。やっと Danya に会えたときは本当にうれしくて興奮してしまいました。Danya は私としゃべるときにはわかりやすいようにとてもゆっくりと話してくれて、私の単語を並べただけのような英語でも一生懸命に聞いてくれました。Danya のお父さんとお母さんの英語はとても速くて何度も聞き直すことがあり、どうしても聞き取れないときもありました。でもそんなとき、Danya は私が理解できるような英語で言い直してくれました。Danya は音楽が好きで得意のギターを演奏してくれ、私も Danya の好きなパッフェルベルのカノンや私の好きなリチャード・クレイダーマンの曲をキーボードで弾いたりしました。偶然 Danya も CD を持っているほどクレイダーマンが好きだったので、一緒に楽しい時間を過ごすことができました。

学校では Danya について行き、一緒に授業を受けさせてもらいました。ケントの授業は月曜日から金曜日まで毎日同じ時間割の繰り返しで基本的には同じ授業しか受けていないので、私は Danya が受けていない他の授業も受けてみたくなりました。それで先生がホストの人たちにお願いしてくれて、ほかのホストについて行くことになりました。私は Connor（コナー）と一緒に授業を受けさせてもらいました。Connor が受けている授業のひとつに演劇というものがあり、そこではダンスもしていて、その授業を受けている生徒みんながとても生き生きとしていて楽しそうでした。私はミュージカルが大好きなこともあって、その授業は私にとってとても魅力的なものでした。

日本語クラスでは日本のことを紹介しました。そのとき私はけん玉も紹介して、いろいろな技を失敗しながらも実際に見てもらいました。けん玉をいくつか持って行ったのでみんなにも挑戦してもらうと「おもしろい！」と言って、気に入ってもらえました。また、千代紙や和紙で小さな着物をたくさん折って日本から持って行きプレゼントするととても喜んでもらえました。放課後に出かけるときは北野生やほかのホストの人たちと一緒のことが多くて、Danya の家族と過ごす時間は少なかったけれど、ほかのホストの人たちとも仲良くなれたのは嬉しかったです。ホストの人や学校のお友達、ケントの人たちはみんな、本当にフレンドリーでした。

Cherry Blossom Festival というお祭りでは、北野と阿武野高校との合同で阿波おどりをしました。私が小さいころから阿波おどりを踊っていたのがきっかけで阿波おどりを披露することになったけれど、日本での準備がとても大変でした。踊りの構成を考えたり、鳴り物の音楽を用意したり、衣装のハッピやうちわを手作りしたり、何回も集まって練習しました。

みんなで力を合わせたかいがあって本番では楽しく踊れ、客席も盛り上がりました。阿波おどりは実際に踊ってみると楽しいので、客席の人たちとも一緒に踊れたらもっとよかったなぁと思いました。

そのあと私は詩吟を吟じました。詩吟は日本でも若い人たちには馴染みが少なく、みんながどんな反応をしてくれるのか、正直不安でした。日本なら静かに最後まで聞くのですが、さすがアメリカ、吟じている最中から歓声やヒューヒューと口笛まで聞こえてきました。歓声の中で詩吟を吟じたのは初めてだったのでなんだか恥ずかしいようなうれしい気分でした。

そのあと日本の楽器である横笛と、Ａくんのヴァイオリンとでアメリカの国歌を演奏しました。横笛とヴァイオリンとの組み合わせはおもしろいのではないか、ということで当日直前に決まったので、ぶっつけ本番となってしまいました。私は国歌をよく知らなくて途中までしか吹けなかったけれど、Ａくんは最後まで弾いてくれました。ヴァイオリンは本当にすばらしくて客席は割れんばかりの拍手と歓声に包まれ、会場全体が興奮していました。アメリカの人たちは見る姿勢が真剣で、演技に対する反応がよくて、このような雰囲気は絶対に日本では味わえないだろうなと思いました。

2 週目のホストのナオコは日本人のクォーターでしたが、日本語はまったく通じませんでした。それでもナオコとすぐに仲良くなれて、二人で電車に乗って買い物にも行きました。清算のときには必ずと言っていいほど店員さんに話しかけられ、私はパニックになってすぐに英語が理解できなかったり、何と答えていいのかわからなくなったりしました。でもそのたびにナオコが助けてくれました。ナオコは車の運転ができて毎日助手席に乗せてもらって学校に行きました。家から学校までの間には、馬や牛、ラマが放牧されているのを見ることができたり、リスが私の乗っている車の前を横断したりでびっくりするということもありました。ケントは雨が降ることが多かったのですが、雨でも傘をさしている人がいないのにも驚きました。雨の日でも、ケントは湿度が低くてぬれてもすぐに乾くので、みんな傘をささないそうです。ケントは自然が多くて空気もとてもきれいで、晴れたときは本当に気持ちがよかったです。

私はアメリカで誕生日を迎えたので、行く先々で何度も祝ってもらいました。プレゼントをもらい、ケーキもそれぞれのホストのお母さんやお友達が作ってくれました。私の誕生日は、日本では春休み中で誕生日を忘れられることも多く、今までこんなに大勢で祝ってもらったことがなかったので、本当にうれしくて感激しました。

この 2 週間は私が予想していたよりもずっと短く感じ、目に映るものすべてが新鮮なことばかりで、一日一日がとても充実していて、毎日の時間がとても早く過ぎて行きました。そしてこのホームステイで自分の英語力の無さを改めて感じ、これからはこの経験を生かして

もっともっと英語を勉強し、自分の気持ちをきちんと相手に伝えられるようになりたいです。このホームステイで受け入れてくださった学校、ホストの人たち、そしてお世話になった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

I love you, America!!

3年4組　B.K.

今回のホームステイ、僕にとってとても貴重な体験になった。初めはあまりたいして行く気もなかったんだけれど、いざ、応募が始まってみると行ってみたくなって応募した。初めはほんののりだった。それが意外にも幸運の持ち主だったみたいで、くじを引き当てて、アメリカへ２週間行ってみたらもう楽しくて楽しくてしょうがない！！ホストの人たちも僕らが暇をしないように常に気遣ってくれて、連日いろんな所へ遊びに行ってた。まず、僕のホストをしてくれたBrentとBrianについて紹介しようと思います。一軒目のBrentは背が高くて、優しくて、いつも気にかけてくれていて、ほんま兄貴みたいな人だった。Brentは友達がいっぱいいて、学校で歩いてたら、「This is my friend,〇〇〇」見たいな感じでいつも教えてくれた。あまりにもその人数がおおすぎて、名前を覚えられないのもしばしば。最終的に半分もおぼえられてないんとちゃうかな？Brentの家へ行って一番びっくりしたのがお風呂で体を洗うやつが、タオルじゃなくてたわしっぽいのを使ってたという・・それにはあ～やっぱアメリカ人なんだなという感じがした。２軒目のBrianはBrentと比べれば子供っぽくて最初はこの人とやっていけるんかと思ったけど、心が打ち解けてからは、いっぱい話すようになって、まあいわゆるボーイズトークを繰り広げてました。というのは、寝るときまで、部屋を共同で使ってたからかも。帰りの空港では「You are my Japanese brother!」と言われるくらいまで仲良くなった。

話を戻して、初日、この日は初めBrentは合唱クラスの旅行からまだ帰っていなくて、他のホストの人達と一緒に行動するという、ちょっと不安な幕開けから始まった。Pike Place Marketっていう市場で食べたハチミツゼリーとかドーナツとかあまりにも甘くて、吐きそうになったこともあった。あとはSpace　Needleに言ったり、Danya(Ｍさんのホスト）やBonnie(Ｍさんのホスト）の家に行ってゲームしたりと初日からおもいっきし飛ばしました。その次の日から学校へ行って思ったのが、広い、食べ物でかい、人が多い、授業の数が多い。（なんで演劇とかオケがあるん？とか・・）とにかくいろいろびっくり

した。授業風景は先生が紙ヒコーキを飛ばしたり、生徒のほうはしゃべったり、ガムを食べたり、ゲームをしたり、中にはパイケーキ見たいなん机の上に出して食べてるのには一番驚いた。でもその反面、きちっとしゃべらないで受けてる授業もあって切り替えがすごいと思った。木曜日には１日授業ホスト交換っていうのがあってBrentとDanyaを交換して、１日の授業をDanyaについて回った。彼女は本当に優しい子で、いつも気遣ってくれて、いまやってる授業で、内容を逐一教えてくれたり、しゃべってもいい授業では、ずっと話の相手をしてくれた。（ちなみにBrentはそういうところは抜けてたかな？）しゃべって学校が終わったら、Brentと一緒か、みんなと一緒かで、基本はみんなと行動することのほうが多かった。でも、それだけ楽しければ別れもつらいわけで、ホストチェンジの時何回もウッドのみんなと別れをかみしめた。その後、もちろんBrianのところに行くわけやけど、最初の１日は、ホームシックならぬ、いわゆるウッドシックにかかってしまって、元気が全く出ずBrianには多少迷惑をかけてしまったかもしれないです。まあでも結局Kentlakeもすごい楽しめた。Kentlakeの人はKentwoodと比べて悪友ってかんじで、夜遊び的なことをすることが多かった。初めの夜は、森で攻撃側と防御側に分かれて、お宝を守るっていう、森で駆け回るゲームをした。それと最後の日にやったLaser Tagっていうゲームが、アメリカでやった中では一番面白かった。Laser　Tagていうのは迷路の館で打ち合うゲーム。ちなみに28位中７位でした。後はボーリング、ビリヤード、ゲームセンターとかも行った。僕がアメリカの家を見て驚いたのがTiaの家で、ほんまでかくて、アメリカっぽくて家にゲームセンターまであった。Tiaの家にはみんなで２回行って、Brianが言ってたけど、夜遅く車で出かけてたら、警察に麻薬常習犯と間違われるみたいです。危ないですね。後、シアトルで一番でかいショッピングモールには結局３回も行ってしまいました。梅田の店とか話にならないほど、とにかくでかい。そうこういろいろ楽しんでたうちに、本当のお別れのときがやってきました。ホストチェンジの時もつらかったけど、こっちのほうがつらい。何しろずっとお別れなんだから。でも、帰ってきた今もいろんな手段をつかってアメリカのみんなと連絡をとっています。一部の人とは再会の約束もしています。だって絶対にもう一度会いたいから！こういう機会を与えてくれた皆さんと北野高校のこの伝統には本当に感謝しています。感謝してもしきれない！そして、これからケントに行くことのできる後輩のみんな、もし悩んでいるんだったら、、、いや、悩んでいなくても！絶対行くべきです。だって、アメリカに旅行で行くことはできても、実際高校に入ってみて、現地の友達を作ることなんてこの機会を逃せばないでしょ？なんでぜひ行ってください。最後に、本当にありがとうございました！

LOL（laugh out loudly）

3年7組　A.T.

10 時間のフライトを経て、もうまもなくシアトルに着くという時の僕の興奮はこれまでにないものだった。そう、今まで待ち憧れていたあの「アメリカ」がもう目の前。雲の間からは美しい緑があふれていた。だんだん山がハッキリ見えてくる。木々の一本一本が認識できるようになりそのうち家が視界に入り、タコマ空港にとまっている車を見た時にはもう地面が目の前。僕の目の高さが空港の建物と同じぐらいになろうとした頃、飛行機の滑車が地面についた。アメリカに着いてまず初めに感動した瞬間だった。ここから僕らの愛しい13日間が始まった。

1 週目僕のホストは Connor。Connor は cool でおもしろい。再開はハイタッチで迎えた。Connor とは去年の夏に日本で僕が彼のホストをした時からの付き合いだ。Connor の家は大きくてきれいだった。2 階の一室を用意してもらったのだが、その部屋はホテルか！？と思ってしまうほどきれいだった。家族の方も本当に親切にして下さり、リラックスするように色々気を配って下さった。

さて、着いたその日は Space Needle というタワーを上ってシアトルの景色を一望した後、シアトル観光をして、あらためて俺は今アメリカにいる、ということを認識し、また信じられない気持ちになる。そして次の日から学校へ行くこととなった。学校までは Connor の車で行く。そして驚いたことにアメリカの学校は日本と全く違っていた。校舎が広い、生徒が多い、そして授業の種類がはるかに多かった。オーケストラ、ブラスバンド、コーラス、写真、演劇、育児、ガーデニング、陶芸、フランス語、イタリア語……。これは部活か！？と思うようなクラスがいくつもあり、生徒がこれらを自由に選択できると聞くと羨ましかった。また毎日時間割は同じで、自分がこれを学びたいと思う教科を選択して、それを毎日学んで理解を深めていく。授業中についていうと、ガムを噛みながら机の上で足を組んで日本ではありえないようなことをする。生徒どころか、先生も平気でそんなことをする。英語の授業では紙飛行機を飛ばして遊んでいる先生もいた。しかし、そんなことをしていても日本の授業とは何故か雰囲気が違う。みんながみんな授業では積極的なのだ。全員がその授業を楽しんで、なおかつ主体的に参加している。みんな自分の意見をずばっと言うと、それに対して他の生徒が違う意見を述べ始める。ガムをかむ生徒、先生、机、椅子、教室、教室に貼ってある先生の趣味のマリナーズのポスター・・・すべてが一体となって、一つのムードを作り出していた。授業を

「受ける」というよりむしろ「作る」といったほうが正確だった。

基本的に KentWood では Connor と一緒に授業を受けていたので Connor が友達と会うと、その度に友達を紹介してくれて、僕も自己紹介から始めてたくさんの人と仲良くなった。みんなフレンドリーで廊下でもすれちがう度に「こんにちは～」と手を振ってくれたり、握手したりした。

学校外でいうと、Connor は色々なところへ自分の車で連れていってくれた。毎日毎日僕らのホストの間で色々計画を立ててくれていたようだ。Connor の近所の友達のところに遊びに行ったり、レストランに行ったり、シアトルで人気のサッカーチームの試合で興奮したりもした。Mcdonald’s へ行ったのだが、最初 Connor が ″We are going to McDonald’s.″ と言ったのだが、その McDonald’s が全くききとれなかった。Connor の指さすほうに McDonald’s があったので ″Ah! McDonald’s?″ と聞き返すと今度は逆に向こうに通じなかった。何度かアクセントを変えて言ってみるとやっと通じた。アメリカ人は最初の Mc を殆ど発音しない。このようなことは色々な単語において何度もあった。単語を知っていてもきちんとした正確な発音を知っていなければ、結局は全て音で判断するため、通じるものも通じないのだと思い、改めてその重要性を感じた。

一週目最後の金曜日は桜祭りがあった。僕らも準備していた阿波踊りを踊ったのだが、その観客の反応がこれぞ、America という感じでとにかくテンションが高く「ヒューヒュー！！」という歓声が絶えなかった。

そんな一週目も終わってしまい、Connor と Connor の家族とは涙で別れた。そして後半の二週目、ホストは Cory だった。Cory も去年の夏に Connor と一緒に北野に来ていたので実はすでに知っていた。Cory はいたずら大好きでジョークが上手かった。そしてジョークを言い終えたあとの決め台詞はこう ″I Am a Boss.″ Cory は僕にアメリカ人の前で言うと絶対ウケるジョークを多々教えてくれた。KentLake では Cory の友達に何度もそのジョークを言って一緒に笑ってたくさんの友達をつくった。また、彼は陸上部に入っており、それに僕も参加させてもらった。陸上トラックは本格的で、中のサッカー場は芝生だった。Kent 地区は緑が豊かで車の通る道路はつねに木々に囲まれていて、家の庭はもはや森のようだった。そんな中で走るのは本当に幸せだった。学校が終わると Tia の家によく集まって遊んだ。Shopping にも出かけた。Cory の提案でお揃いの服を買った。アメリカのプリクラもとったが、証明写真のちょっとカラフル版みたいな物だったのでアメリカではそこまでプリクラが人気なわけではないらしいことを知った。帰りは Cory の車で音量 Max で音楽を流しながら帰る。アメリカに来て始めの頃、これは結構周りの目が気になっていた、がだんだんノリノリになり耳も心も慣れてきて、今では「音量 Max

以外ありえへん！」と思えるようになった。大分アメリカのノリには慣れてきたようだった。

13 日間はあっという間に過ぎて気付けば空港にいた。13 日間、言葉の壁があることによってこそ感じることが出来たのは、人の心の温かさ、愛だ。本当によく笑った。何故こんなにも英語がしゃべれない僕が 13 日間楽しくやっていけたか？結局は皆同じ「人」なんだと。だから心を通じ合わせることができるのだと思う。最後は国境を越える別れだと思うと悲しかったが、"See you again." で別れたのでいくらか心が落ち着いた。次会うのが楽しみだ。最後になりましたが、この僕らのシアトル訪問に携わって下さった KW,KL の先生方、北野の先生方、そしてもちろんホストファミリーの方々に感謝したいです。愛しい 13 日間をありがとうございました。

「驚きの連続」

３年７組　K.T.

ケントでの滞在はとても刺激的でこの国際交流の企画に参加できたことを本当によかったなと思っています。ケントに行く前は正直、遅刻や居眠りばかりしている自分が行くのは申し訳ないという気持ちもありました。しかしすばらしい経験をし、帰ってきた今は、成績など気にしないで思い切って応募したのは正解だったと自信を持って言えます。

僕の一軒目のホストはダニエルといって、普通にアメリカ人の名前ですが両親は韓国人です。まず驚いたことに彼は学生なのに車の運転ができました。

また両親は非常に忙しくほとんど会うことはありませんでした。そんな訳で僕はずっとダニエルに車でいろんな所に連れて行ってもらいました。本当に彼にはお世話になったので感謝しきれません。

思い出はあまりに多くて語りきれませんが、とくに印象に残っているのは、ボーリングに連れて行ってもらったことや、激辛なチキンを食べたことです。

ボーリングは、初日のまだ時差ボケで眠たくて仕方ないときに連れて行ってもらいました。僕は寝たいと言ったのですが、時差ボケを早くなおすためにも、９時までは絶対に寝るなと言われてのことです。正直ボーリングは苦手なのですが、そのボーリング場の雰囲気とそこでボーリングをできたのが、すごく思い出に残っています。次に激辛のチキンというのは、世界一辛い唐辛子を使ったチキンで、もはや辛いというレベルではな

かったです。というよりもはや食べ物ではありません。ちなみに他のホストのBonnieはこれを食べて帰りの車を運転できませんでした。（笑）

そして楽しかったケントウッドでの思い出の最後はチェリーブロッサムフェスティバルです。これは本当に大きな祭りで、僕たちは阿波踊りを披露しました。また他の人の出し物はすごくレベルが高く感心しました。次の日のケントウッドのホストとの別れは本当に悲しかったです。正直ここまで別れが悲しいと思っていませんでした。

次のホストはショーンと言って今度は純粋なアメリカの家庭といった感じでした。家の近くは本当にきれいな町で自然に溢れていました。今度はショーンは車が運転できなかったのでホストファミリーと過ごす時間が多かったです。またショーンはもちろんショーンの家族は皆明るくてすごく親切でした。

休日にはあこがれの国立公園に連れて行ってもらい、すごく満足しています。　こちらのホストは、ケントウッドのホストよりも想像していたアメリカの10代のイメージに近くいろんな意味で刺激的でした。（笑）他のホストの家にちょくちょく遊びに行きましたが、その家はケタはずれなでかさで小屋の二階はもはやちょっとしたゲームセンター。うーん、ありえない。この折り返しの一週間は本当にあっという間だったように感じます。そしてアメリカ最後の日にはケントウッドもケントレイクもホストが来てくれて本当にうれしく、また本当に別れが悲しかったです。

最後にアメリカでの学校での生活について書こうと思います。まず初めてのアメリカの高校は驚きの連続でした。というのもアメリカの高校は日本と違ってすべてが本格的です。なんといってもケントウッドではバスケットコートは二つあり、陸上のトラックや、野球や、フットボールには、それぞれにグラウンドがあります。また授業は毎日同じもので、これもやはりすべてが本格的、例えば、オーケストラの授業やいろいろな教科が細かく分類されていて、高いレベルだと大学レベルのことも学べるようになっていました。また驚いた教科は料理クラスと陶芸クラスです。学校で料理と言えば日本で言う家庭科を想像しますが、アメリカの料理クラスのハイレベルなものは、本当に料理人を目指す人たちが対象なので、授業ではソースの作り方の基本などを学んでいました。

陶芸クラスは、本当に電気ろくろがズラーっとならんでいて、みんな自由にかなりレベルの高い作品を作っていました。僕も三回ほど行きましたが全く形になりませんでした。あと、この滞在中は日本語クラスに多く行くことになったのですが、アメリカの日本語クラスの学生は本当に積極的で、僕たちに慣れない日本語でよく話しかけてきました。あとアメリカのいいところだなと思うのですが、学校を歩いてるだけでたびたび話

しかけられ、身をもってアメリカ人の社交性の高さを感じました。他にもたくさん書きたいことはありますがこのくらいにしておきます。この滞在ではホストにも恵まれて本当に楽しませてもらい感謝しています。

僕はこの国際交流企画を本当に素晴らしいと思うので、ぜひこれからも続いて欲しいし、後輩たちにもこの素晴らしい経験をしてもらいたいと思います。最後にもう一度言います。この企画に参加できて本当によかった。

② KENTWOOD 高校滞在記（教員編）

英語科　小田切佳代子

始めに）今から１０年前、まだこの交換プログラムが今ほど完備されていなかった頃、当時１年の担任であった私は教えていない派遣団２年生の付き添い教員として２週間滞在した。（今から思えば実に優秀な生徒達であったと思う。内の一人は本校非常勤講師や、総合学習「大学セミナー」の講師をして頂いた、今も京都大学教育学部大学院に在籍されているＴ先生である！Ｔｉｍｅ　Ｆｌｉｅｓ！）思い出すと、行く前の当時の緊張感は、久しぶりの海外渡航で、またこれもさらに久しぶりのホームステイということもあり、ものすごいものであった。２週間という長さでは行く準備も大変であったし、行く前にやっておくべき仕事もさぞかしあったのではないかと思う。しかし、それで得られた収穫は比類なきものであった。勿論、当時は、今とは自分の置かれている立場も、学校の状況も、交流プログラムの組織内容も違っていたので、今回私が２度目の訪問をさせて頂くにあたり、前回と全く同じような収穫を期待するのは無意味である。私は前回とは違った角度から収穫があれば良いと期待し、何より旧交を暖め、自分の教え子である１２３期生派遣団との１週間という異国での体験を共有したかったので付き添いを引き受けた。そして私がどのような収穫を得られたかはこの後、手記を読んで頂いたらすぐにおわかりになるだろう。

出発当日）早めに空港について、旅行業社の方とお会いした。順次、生徒や保護者の方達が到着。荷物の量は彼らは２週間滞在なので半端ではない。きっと昨夜は夜なべで荷物を詰めているだろうに、興奮しているせいかやたらハイで元気である。まあ、飛行機の中ではいやというほど時間があるのでその時に寝るつもりだろう（実際は寝るどころか、トランプやおしゃべりで元気印は続行でした！）と、見送りに来て頂いていた福

本先生や高橋先生と雑談していた。さていよいよ出発である。今回は機械で搭乗の手続きをせねばならず大変だった！普段、ゲームや携帯などいじって操作に慣れているはずの生徒達も四苦八苦でした。（何でも機械化というのは果たして便利なのでしょうか？）噂に聞いていたように、持ち物検査は厳戒、厳重で、長蛇の列。生徒達は最初緊張しているようだったが、すぐに慣れ、係りの人と軽く会話を交わしているようだった。さすが現代っ子！私は免税品店などの誘惑に負けないよう、ひたすら搭乗口まで長い距離をずんずん引率して、ここで一端解散してあとは出発を待つばかり。無事に飛行機が離陸したときには（本当に）やれやれと安心した。

日本を発ったのと同じ日付になるが一日目）

飛行機は無事タコマ空港に到着した。食べたり、飲んだり、寝たり、ビデオを見たり、話したりであっという間の８（９？）時間であった。当たり前のことだけれど外に出ると周りは全部英語、英語、英語！生徒もこの単純明快な事実にやはり感動（恐れ？）していた。ちょっとだけ困って出迎えロビーを探して後はいよいよ生徒はホストの方達と感動の対面である。昨年本校を訪問した交換生の見知った顔もあり、何より、レイクのシーマン先生は日本の方なのでほっと安心した。挨拶を済ませ、ホストの方達にも挨拶をして生徒全員がそれぞれの未知の世界へと飛び込んで行くのを見届けた後、いよいよ私もいざ出陣！とまあ、意気込んでホストのショー先生にご挨拶をした。先生は昨年度も小林先生のホストを引き受けて下さった方で（何と寛大！）、私は二人目のゲストである。その豪邸の写真やお仕事のこと、ご家族のことはすでに小林先生からお聞きしていたので初対面とは思えず、懐かしい感じがした。先生の話す英語がとても早く、また独特のアクセントがおありで、とても聞き取りにくくて困ったがこれには最後まで慣れなかった。（情けない！）先生のご趣味はクラシックなので車もすごいクラシックカーだった。（～？年代）３０分ほどの快適なドライブで緑の多い豪邸に到着。車窓からは道路も家も何もかもやはり大きいアメリカ。ボートもあり、トラックもあり、バーベキューができるお庭もあり、これで二人住まいとは！日本の住宅事情の厳しさを思い知らされた。北野高校からのおみやげの暖簾（歌舞伎の絵が描かれたもの）や私的なプレゼント（藍染めのネクタイ）をお渡しすると、本当に喜んでおられた。日本の文化がとても気に入っておられるようだった。昨年度のおみやげらしい扇も暖炉の上に大切に飾ってあった。私は部屋に案内して頂き疲れていたので少し休むことができた。先生は気を遣って一人ゴルフに行かれていて、私が仮眠から起きてきた時には、夕方からスーパーへ買い物に行くとメモがあった。海外での楽しみの一つはスーパーでの買い物である。何よりデパートより値段が安く、日本にないような珍しいものが間近で見て取れて、市民の生活感

をまのあたりに感じることができるからだ。先生のお宅から歩いて１０分位の所に大きなスーパーがあり（この後私は一人で何度も足を運ぶ事になるのだが)、本当に食品から家具まで何でもそろっている。大きなカートにどんどん品物をほりこんでいって、最後にカードで精算する。現金を使う人は殆どいないそうだ。先生は私の夕食に、とキングクラブ（大きな蟹）を買って下さり一緒に料理しておいしくいただいた。夕食時に婚約者のエリカさんともお会いし、ステイのお礼を伝えることができた。いよいよ明日から学校である。朝が早いので（６時半出発。でもこれは私が日本にいる時と変わらないので平気。）早く就寝して明日に備えた。生徒達と会えるのがとても楽しみだった。

二日目）

朝早くに日本語のクラスで集合。皆、昨日の日曜日の報告でどこに行った、何を食べたの話でもり上がり、どれだけホストに大切にしてもらっているかがよく伝わってきた。有り難いことである。しかし、慣れない食事や言葉の壁に早くもぶつかり、やや不安げな様子もちらほらあった。ホストの生徒達が本当によくしてくれて、がっちりガードしてもらっているという感じがした。副校長のアイーダ先生が私と生徒全員をつれて校内見学ツアーに連れて行って下さった。校舎内施設をくまなく案内し、授業に入ってはその都度私達を紹介し、各授業の内容を説明して下さった。生徒にわかるようにゆっくりとした丁寧な英語で話して下さり本当に有り難かった。校内には時々授業に出ずに廊下で座っている生徒がおり、見つけるとすぐに名前で呼んで声をかけ、喫煙や携帯など校則違反をしているときは迷わず注意されていた。副校長という高い地位にありながらも生徒の視点からも生徒全員を見ようとする姿勢にはいたく感動した。先生はアフリカ系アメリカンである。これまでの長い教員生活にはそういう意味での苦労も多かったのではないかと推察され、ますます頭が下がる思いだった。殆ど午前中を使ったので生徒とランチを取り、午後はそれぞれがホストの授業に分かれていった。私もいくつか授業見学をして２時半すぎ〔早い！〕ショー先生と帰宅した。２度目の訪問なので今回は授業見学も絞ることができ、そういう意味では動き易かった。前回は食堂のメニューまで写真に撮るなど、なにもかも珍しく、大変だったのを思い出すと、自分にゆとりがあるせいか気楽だった。帰宅後先生はボーリングに行かれ私は周辺をゆっくり散歩などした。

三日目）

午後から市長訪問がある大切な日である。生徒は言葉の壁が大きく立ちはだかっているようでやや憔悴気味。アメリカで友達を作りたいと思う気持ちが強く、それなのに話せないといういらだちや、焦りや自己嫌悪など、到着後、２，３日目に必ず襲ってくる波—これは自分との戦いなのだ。自分の中に相手を理解しよう、自分を理解してもらお

うという強い気持ちを持つこと、言葉ではなく気持ちを伝えようとすること、心が先なのだ。すると言葉は後から必ずついてくるもの。このように一生懸命励まして、彼らも少しは元気が出た模様で気を取り直して日本語のクラスでのプレゼンへと向かう。（プレゼンはきっとうまくいったはず。）約束の時間に市庁舎で待ち合わせてまずは市庁舎の案内ツアーへと参加する。役所の女性の方が詳しく説明しながら市庁舎全体を案内して下さった。あいにく、英語も早く、説明も専門的で詳しすぎて生徒も私もいまいちよくわからなかった。残念。いよいよ市長さんが来られて生徒一人一人（教員も）の名前を呼び、国際交流の認定書の様なもの、を手渡して下さった。生徒はおそらく議会のような公の場で人前に出て市長のような方と話すのは初めての経験であったろう。返事の声が小さくはないだろうか、失礼なことを口走ったりはしないだろうか、などという思いは全て杞憂だった。生徒は高校生らしく明るく爽やかに応対していた。市長さんはもとは教員をしておられたというだけあって教養があり、暖かくユーモアあふれた立派な女性だった。教員の挨拶はない、と聞かされていたので安心していたのにいきなり阿武野高校のおみやげの煎餅の由来など聞かれ、生徒の前なのに焦ってしまった。各自おみやげのカップやペン、ステッカーなどをもらい皆上機嫌で帰っていった。

私はその日は二度北野に引率に来られたザモラ先生（一度目に私の家にステイされた。）のお宅に泊めて頂くことになり、本家の（？）ハンバーガーのお店でご馳走になった。それはあまりにも厚みがあって口が開かなかった。結局全部はがして食べることになってしまい、ハンバーガーという気はしなかったがとても美味しかった。ポテトは大きなどんぶり一杯くらいあって、これはお持ち帰りになった。しかし、こんなものを毎日食べていたらたちまち生活習慣病にかかってしまうのにと、周りのふくよかなアメリカ人を見て、ついつい思ってしまった。翌日は、「目覚ましなんか要らない。」と言っておきながら、「ＫＡＹＯＫＯ，ＫＡＹＯＫＯ」と独特の彼女の声で目が覚めたら、朝の７時前だった。緊張していたのか初めての寝坊だった。５分ほどで準備をしてあわてて出かけた。

四日目）今日は市岡高校、井草高校、阿武野高校の皆とシアトルツアーに朝から参加。生徒達はそろそろ授業にも慣れてきた頃だったので新鮮なのか、大はしゃぎ。バスの中は案内の先生の声も通らず、こちらがついつい、いつもの調子で他校の生徒さんも一緒に怒鳴りつける始末。シアトルでは昨年のミュージカルが不評だったので３Ｄの映画鑑賞となった。生徒は内心はやりの映画を期待していた様だが、いたって高尚な宇宙や宇宙船の映像でがっかりで、睡魔と戦っていたようだ。私はというと本当に星雲などがきれいで初めての３Ｄ経験を十分に楽しんだ。お昼は自由だったので付き添いの先生方と

これとばかりに白いご飯を探して食べた。ベトナムのカレーみたいなものでカレーは甘く辟易したがご飯は美味しかった。楽しい遠足の一日だった。

五日目）今日は桜祭りのリハーサルの日。会場となるケントリッジで参加団体が夜の６時から本番さながらのリハーサルを行った。もっと簡単なお祭りかと思っていたのでリハーサルまであると聞き少々びっくりしたが、本校の生徒の出し物は阿波踊り、詩吟、バイオリン演奏で、どうも十分に練習ができていない様子だった。実際リハーサルでは（全員そろっていない事もあったが）自信なさそうで元気もなく、声も小さく、踊りもバラバラで、とてもこれが生徒の本来の出来とは思えなかった。会場の反応は悪くはなかったのだが、これが彼らの実力とはとても思えなかったので全員を前に苦言を呈した。多少きつく言い過ぎたかとも後悔したが、日本の文化を紹介する以上は、（大げさだが）アメリカの人たちに感動を与えてほしかったのだ。その後彼らはもう一度自分達で話し合い、内容を練り、練習もし、本番では驚くべき変化を遂げることになる。

六日目）ウッド高校での最後の一日。朝から校長先生と会食に出かけた。
近隣の有名なレストランで校長先生や副校長先生との正式なアメリカスタイルの朝食会。多大なメニューの中からそれぞれが自分で選ぶことから大変だったが、それも勉強だと校長先生は考えておいでのようだった。忙しい方で学校に到着してから５日目にしてようやくお会いする事ができた。校長先生は気さくで温厚なアメリカ紳士という感じの方でユーモアを交えて生徒にいろいろ話しかけておられた。この頃では生徒はもうすっかり現地の生活に慣れ、それが気に入っている様子で全く臆することなく校長先生の質問に元気に答えていた。若い人は本当に環境に順応するのが早いとつくづく思い知らされた。この日の生徒達はホストの生徒との別れが本当に辛い様であった。たった１週間でも寝食を共にするというのは強い絆を生むものである。明日のホスト交換の時、涙、涙の別れが待っているかと思うと正直私も少し複雑であった。北野の生徒達に親切にしてくれた感謝の意味を込めてそれぞれに手製のカードを渡したら本当に喜んでくれていた。彼らにもこれはきっと楽しいだけではない、よい経験になったのだろうと思う。いよいよ桜祭りの本番になった。それぞれがホストに連れられて、私はショー先生とケントリッジ高校へ向かった。会場では柔道の交流プログラムで参加している沢山の高校生まで参加していて予想以上のすごいにぎわいだった。体育館でのセレモニーではそれぞれのホスト校の代表者が名前を呼ばれた引率教員と向かい合って記念品の交換をした。私は校長先生に北野高校のアルバムとおみやげを渡し、無事その大役を終えた。会場では焼きそばやお好み焼きなど日本の食べ物が屋台のような形で販売されていて、沢山の人が行列を作っていた。アメリカ風焼きそばを試食するチャンスはなかったのだが、この売

り上げが交流プログラムを経済的に支えているとシーマン先生から伺った。ご苦労されている様子をみて北野高校には国際交流基金というのがあり、そういった心配なく活動ができて有り難いとつくづく感じた。舞台の方ではいろいろな発表が行われていて、いよいよ北野・阿武野の番が近付いてきていた。女生徒は浴衣の着付けもあるので私はステージママのごとく、着付けを手伝ったり、荷物を持ったりで楽屋に入ったり出たりの落ち着かない時間を過ごしていたが、生徒達は寸暇を惜しまず最終仕上げに余念がなかった。私は舞台の裾で生徒達の発表を見守っていたが、リハーサルの時とは別人のように、それぞれが生き生きとしていて、力いっぱい心を一つにして阿波踊りを踊っていた。何より、彼らが楽しんでいたと思う。実に素晴らしい出来映えだった。会場の人達から割れんばかりの拍手喝采を浴び、沢山の人達に感動を与え、おそらくは彼らの胸に長く残る出来事になるだろうと私自身胸が熱くなる思いだった。興奮の余韻が残る中、桜祭りは無事終了しそれぞれがホストに迎えられて帰宅していった。私は翌日の土曜には、オレゴン州の友人と過ごす為、ホスト交換の場は欠席させてもらうことにした。彼らが１週目のホストとよい別れをして、新しいホストに早く慣れ、同じような充実した最後の週を送ってくれることを祈って。

最後の日）

朝、シーマン先生が空港へ送って下さるので、ショー先生のお宅に別れを告げ、いざ空港へ向かった。車の中でいろいろ先生のご苦労話をお聞きした。学校によってこのプログラムへの取り組み方が随分違うこと、金銭面での援助が無くて大変なこと、一部の教員の理解しか得られていないことなど、国は違っても担当者の悩みは同じなのだと実感した。ただ、生徒への影響を考えると、何としても続けていきたいともおっしゃっていた。私も門外漢ながら、今回、付き添い教員として派遣生徒の成長を間の当たりにして（それは語学だけでなく、人間的にも、である。）同じ思いを持った。空港で後半を担当される萩原先生と無事お会いし、情報交換の時間を取ることが出来た。先生とはたった１週間位しかお会いしていないはずなのにとても懐かしく、普段以上に会話がはずんでしまった。私は帰路大阪へ、萩原先生はレイクへ、お互いの無事と健闘を祈りお別れをした。（私は帰りの飛行機の席が幸か不幸か何かの交流プログラムの帰りの大阪の高校生のまっただ中にあって、英語の変わりに聞き慣れた大阪弁ががんがん飛びかっていた。いろいろ頭の中を整理したかったのだが、うるさくてそのいとまもなく、ついつい教師口調で注意したくなる自分を抑えるのが大変だった。）

最後に）

この１週間を振り返ってみて、つくづく生徒達が持つ可能性の大きさ、それは彼らが

持つ柔軟性、感動する心、親切にされて感謝する心、何かに応えようとする心を、ひっくるめてなのだが、それを思い知った。それと同時にその心がまだ未完成な場合、それをサポートする、適切な助言や助力が如何に大切で責任があるかということも感じた。そして国際理解、異文化理解は究極のところ自分を知る、母国を知る、ということにつながるということを痛感した。１２３期生に１年からずっと英語を教えてきていつも伝えきれずにいたことがある。英語は楽しい。英語が読めるようになって、書けるようになって、話せる様になって知らない国の事がわかったり、知らない国の人と話せたり、知らない国へ旅行できたりするのは本当に心躍る経験である。しかし、私達は所詮日本人、日本語を話す民族なのだから、どんなに上手に英語が話せてもいつかは必ず限界や壁にぶつかるのだ。そしてその時それを埋めるのは人間としての自分の持つ迫力、オーラ、言葉では伝わらないものを感じる心なのだということ。英語という道具があってもそれを使って伝えたいもの、伝えたい自分が無ければ相手を感動させる事が出来ないということ。１２３期派遣団は、着いてからしばらくはカルチャーショックで落ち込んでいたけれど、すぐにその不安や壁を乗り越え、持ち前の明るさとガッツで多くの人と交流を結び、自分達の中の和もしっかり築いてくれた。それは彼らが英語に慣れたことも勿論あろうが、それと共に彼らが多くの人に感謝し、心でそれに応えようとしたからではないだろうか。多くの人達の善意と努力によりこの交流プログラムは絶えることなく長く受け継がれて来ている。関わった人達が皆、その労苦はあっても、それに応えるに余りある成果や意義を感じているからこそなのだろう。最後にケントウッド高校ではホストのショー先生を始め旧友のザモラ先生、交流担当の先生方、授業を見せて下さった先生方、副校長先生、お昼に気楽に話しかけてくれた食堂の方に本当にお世話になった。派遣に当たりいろいろ準備して下さった小林、福本先生始め、事務の方々、そして１週間を共に過ごした派遣生５人組に心から感謝をしたい。（終）

Kentlake 高校滞在記（教員編）

国語科　萩原美香

2010 年 3 月 28 日～ 4 月 4 日の１週間、ケントレイク高校に滞在しました。ここでは皆さんにアメリカの学校の様子をご紹介しようと思います。

ケントレイク高校はシアトルから車で１時間程の所にある学校で、生徒はみんなスク

ールバスか車で登校します。奈良や和歌山辺りで、電車がない地方の学校をイメージしてもらえばいいかもしれません。築 11 年の校舎はとてもきれいです。

校舎正面では、かつて上田先生が訪問された時に植樹された「上重桜」が出迎えてくれます。滞在中は雨も多くて寒かったですが、ちょっと前までは暖かかったそうで、桜はすでに終わりかけていましたが、こんなに大きくなった桜は両校の交流の年月の長さを実感させてくれます。

ケントレイクの朝は北野よりもまだ早く、7:35 から１時間目が始まります。７時過ぎに学校に着くと、家庭科室の前で生徒がコーヒーを売っています。授業の一環のようですが、バニラコーヒーを 2 ドルで買って飲んでみるととてもおいしかったです。

授業は１コマが大体 55 分です。（なぜか 3 時間目は 59 分だったり、時間によって長さが微妙に違う）私はアメリカの学校は自由なんじゃないかなと想像していたのですが、実際は厳しくきちんとした授業がされていました。調理実習の時には、ある生徒は先生に iPod を没収されていました。

各先生が自分の教室を持っていて、生徒がそこに行って授業を受けるので、たった 5 分の休み時間は生徒全員が大移動するので大変です。また休み時間が短いので、トイレに行く時間もないぐらいです。遅刻をすると許可証をもらわないと入室できません。

アメリカの現代史の授業に行くと、歴史の写真が部屋中に貼ってありました。この時間はＪＦＫの映画の一部を見ました。どの教室にもスマートボードというスクリーンがホワイトボードの横に備え付けてあって、パソコンの画像を映したり、書き込みができたり、タッチパネルのようにもなっています。日本では黒板を使っていると言うと「まだチョークなんて使ってるの？」と驚かれました。どの教室にもアメリカ国旗がありますが、これはプレッジ（アメリカ国家？への誓約）に使います。

3 時間目の授業の初めに生徒による校内放送が流れます。ＨＲがないので、どうやらこの放送で連絡事項が伝えられているようです。その時に教室の国旗に向かってプレッジをします。右手を胸に当てて何か言っているのですが、私には聞き取れませんでした。

この教室は陶芸の授業で、私たちもろくろを使わせてもらいました。しかし見るのとやるのは全く違い、とても難しいようです。他にもいろいろな授業に参加しましたが、演劇やオーケストラや写真の授業などは日本にないものなのでとてもおもしろかったです。

時間割も独特で、ケントレイクでは月曜から金曜まで毎日全く同じ時間割です。つまり 1 学期間、毎日同じ授業を受け続けることになるので、短期間でかなりレベルが上がるのではないかと思います。数学の授業などは北野の生徒が聞いても全くわからないよ

うな難しいことをしているようです。ただ 1 日 6 時間しかないので、1 学期間で受講できるのは 6 科目しかないということになるので、それなら日本の方がたくさんの科目を勉強できるのでいいかもしれませんが、それぞれ一長一短あると思います。

校舎の中心に吹き抜けの大きなカフェテリアがあり、ここが生徒の食堂です。生徒はＨＲ教室がないので、食堂でランチを買ってここで食べます。ハンバーガーやピザ、サラダなどがありますが、自分でオーダーできるサンドイッチが一番おいしかったです。

4 月 1 日にはランチタイムに、書道のデモンストレーションをしました。アメリカの生徒の名前を漢字で書いてあげるというだけのものですが、なぜか大人気で、ひっきりなしに生徒が集まってきます。あるアメリカの生徒が「日本の生徒はエイプリルフールを知ってるのか？」と聞いてくるので、なぜかと思ったらどうやらちゃんと自分の名前を漢字で書いてくれてるのかと疑っているのでした。英語の名前を漢字に当てるのはなかなか大変で、確かに中には？？と思うものもありましたが、きちんと書いてあげていました。

アメリカの学生は第２外国語として、選択で日本語のクラスを取っています。日本語クラスで私達は大歓迎され、アメリカの生徒対日本の生徒でクイズ大会をしたり、楽しく授業に参加しました。今年はアメリカに行く前から日本について紹介するプレゼンテーションを用意していて、それを発表する時間を作ってもらいました。テーマはそれぞれ自分の得意な分野で「祭」「書道」「阿波踊り」「アニメ」「武道」について、実演を交えた、いいプレゼンができたと思います。アメリカの生徒が日本のアニメにすごく詳しいのには驚きました。漆塗りのお弁当箱を持ってきている生徒もいて、こうして日本に興味を持ってくれる人がいるのはやはりうれしく思いました。私自身、今までオーストラリア、インドネシア、中国等の授業を見たりする中で自分なりに世界を広げてきたつもりだけど、今後はもっと世界が狭くなり、交流が深まる時代になると思うので、生徒達にもこういう体験を大切にして、お互いを知りつつ自分自身について考えてもらえたらいいなと思いました。

ある日本語のクラスでは、生徒が自分達で旅行プランを考えて、それを日本語で紹介するというプレゼンをしていました。北野に来るケントの生徒は日本語が上手な子が多いと思っていましたが、これだけの日本語の勉強を毎日していれば、あれだけ話せるのももっともだなと思いました。日本語はやはり難しいので、大学入試では、日本語を選択している生徒は、スペイン語等を取っている生徒よりも意欲的だと評価されると聞きました。

こうして 2:10 に 6 時間目の授業が終わり、放課後にスポーツをする生徒もいるようで

すが、ほとんどの生徒は帰宅します。

私達の滞在中、ケントにある４つの学校合同の「桜祭り」という大きなイベントがあり、私達も参加しました。学校中あちこちにチラシが貼られていて、私達が思う以上にアメリカの生徒達は日本を身近に感じてくれているように思います。そしてその反面、私達はアメリカのことについて身近に感じられているかと反省させられます。夏にはケントの生徒達がやってきますが、その時には北野全体で暖かく迎えてあげられたらいいなと思いました。